

## 小・中学生の家庭生活と学校適応 —JELS2003 報告 (3)

○岩崎 香織 (お茶の水女子大学大学院)  
牧野 カツコ (お茶の水女子大学)

### 1、研究の目的

本研究は、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」のプロジェクトⅢ (プロジェクトリーダー: 耳塚寛明) の一つである「子どもから成人への移行についての追跡的研究」(JELS2003) 児童・生徒質問紙調査の結果の一部について報告するものである。この研究は、日本の青少年の学力・能力、アスピレーション、進路・職業生活の統計的ポートレートを手に入れ、これを、家庭的背景、学校的背景、地域的背景などとの関わりにおいて把握することを目的としている。本報告では、小・中学生の家庭生活と学校適応の関連について明らかにしていく。

教育社会学の領域において、学校適応に関しては、子どもが学校に適応することの意味が時代と共に変化してきた経緯が明らかにされており (耳塚 1980、酒井 1994、伊藤 2002)、1990 年代以降は、大多和 (2000) によって、父母の学歴、学校ランク・成績と生徒文化の結びつきが弱まり始めていることが明らかにされている。これまで階層要因以外に教育社会学では、学校適応に関する家庭生活要因の影響が検討されることが少なく、先行研究にみられる学校適応に階層要因の影響が、実際には、どのような家庭生活状況に結びついている結果であるのかについては、明らかにされていない。

そこで本研究では、家庭生活と学校適応について、階層要因と共に具体的な家庭生活状況の側面からも関連を明らかにし、特に、親子関係の変化が大きいと考えられる小学校段階から中学校段階への移行という視点を取り入れ、検討することを目的とする。

### 2、先行研究の動向

教育社会学の領域では、大多和 (2000) は、1979 年と 1997 年の高校生の「逸脱文化」の規定要因の分析を行い、79 年の男子において「父

学歴が低いこと」「母学歴が高いこと」が有意な規定要因だったが、79 年女子と 97 年男女において、階層要因と逸脱文化との関係がなかったことを報告している。

心理学の領域では、学校適応感を規定する要因として、学業適応や友人適応の他に「家族システムの機能状態」(西出・夏野 1995) などが検討されており、「父親の子どもに対する援助」、「父親とのコミュニケーション」が高校生の学校適応感と正の相関があること (谷井・上地 1994) などが報告されている。

家族社会学や家政学の領域では、少子化や核家族化、家族の多様化から、育児や家庭教育の困難が指摘されることが多く (船橋 1998、庄司 1996)、学校適応に関しては、家庭の教育機能として特に人間関係や自己実現との関連が重視され (牧野 1998)、検討されている (木村・畠中 2003)。木村・畠中 (2003) は、中学生を対象とした調査で「子どものウェルビーイング」 (=子どもの健康と安定した生活が実現されている状態) は、属性要因に統制されることはなく、「家族の情緒的關係」を子ども自身が良いものと認識しているほど高まったことを報告している。

学校適応と家庭生活の関連については、研究領域により使用する変数が異なる。本研究では、以上の先行研究をふまえ、家庭生活の指標として「父母の学歴」と具体的な「家庭生活状況」、「家庭の雰囲気」の 3 点から検討することとする。小・中学校段階の学年進行による変化の視点を取り入れて検討したい。

### 3、研究の方法

#### 1) 対象者

お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム JELS2003 調査 (2003 年 10 月~12 月実施) に参加した関東地方の A 市に在籍する小学 6 年生 1194 名、中学 3 年生 1057 名、計 2251 名。

## 2) 使用する変数

### 家庭生活について

①「父母の学歴」…「お父さんは大学を出ている」、「お母さんは大学を出ている」の2項目について複数回答とした。

②「家庭生活状況」…『教育的環境』『教育的指導』『家庭の文化』の3側面から本プロジェクトで独自に作成した8項目について複数回答とした。

『教育的環境』:「本がたくさんある」、「自分ひとりの勉強部屋をもっている」

『教育的指導』:「博物館につれて行ってもらった」、「1か月間に両親に勉強を見てももらった(小6)」、「小さい頃、よく本を読んでもらった(中3)」

『家庭の文化』:「家の人は毎日決まった時間に起きる」、「自分の家では食事を大切に考えている」、「家の人は近所づきあいを大切にしている」

③「家庭の雰囲気」…菅原・他(2002)の作成した「家庭の雰囲気尺度」(9つの形容詞から構成される次元尺度)のうち、第1主成分への負荷量の高かった項目を抽出し、「あなたの家庭はどんな感じがしますか?」という指示文に対して「あたたかい感じがする」、「楽しい」、「ほっとする」の3項目について、「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で実施した。

### 学校適応について

学校生活について本プロジェクトで独自に作成した11項目(「とてもあてはまる」から「全然あてはまらない」までの4件法)を因子分析し、得られた『人間関係』『逸脱』『学校好き』の3因子に付加量の多い項目を使用する。

①『人間関係』因子(6項目)

「同級生に好かれている」、「学校で新しい友達を作るのは簡単だ」、「男子とも女子とも簡単に友達になれる」、「先生に好かれている」、「他の人と一緒に作業をすることが上手だ」、「他の学年にも親しい友達がいる」

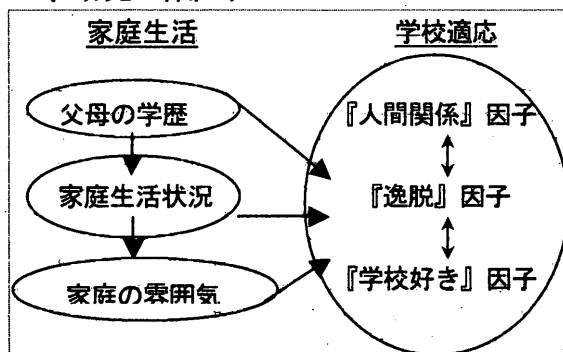
②『逸脱』因子(3項目)

「学校の決まりをやぶる(校則違反をする)」、「授業中教室を抜け出したことがある」、「先生に反抗したことがある」

③『学校好き』因子(2項目)

「学校は楽しい」、「学校に行くのが嫌になる」

## 4、研究の枠組み



父母の学歴などの属性要因は、「家族の情緒的關係」に対する子ども意識を媒介として学校適応に影響を与えていることが示されている(木村・畠中 2003)。本研究では、小・中の学校段階別に、①家庭生活に関する3要素の関連を明らかにし、②それぞれの要素の学校適応(3因子)との関連について比較検討していく。

## 5、使用変数についての既存報告結果(『JELS 第1集 2003年基礎年次調査報告』より)

### 1) 家庭生活について

これまでに小学3年生・6年生及び高校3年生の分析結果が報告されている(岩崎 2004)。

「父母の学歴」と「家庭生活状況」は、『教育的環境』『教育的指導』『家庭の文化』のほとんどの項目で「父母大卒群」が、他群よりも充実しており、男子よりも女子の「家庭生活状況」が充実していた。「家庭の雰囲気」の形成要因を「父母の学歴」と「家庭生活状況」を説明変数として重回帰分析を行った結果、「学年が低いこと」、「女子」、「ほぼ毎日「勉強しなさい」と言われないこと」、「家で食事を大切に考えていること」、「家の人が近所づきあいを大切にしていること」の5点が有意に影響していた( $R^2$ 乗=0.138)。

### 2) 学校適応について

高校3年生の分析結果が報告されている(大多和 2004)。「学校が楽しい」に「とてもあてはまる」「あてはまる」生徒は、全体の78.5%と高く、男子よりも女子に、下位校よりも上位校に「学校が楽しい」傾向がみられた。男女とも上位校で、「学校は重要」と思われているが、男子は、反抗も下位校より多く、単純な向学校一反学校ではとらえられなくなっていた。

※以下、分析結果、引用文献および資料は、当日配布いたします。